

(別紙2)

論文審査結果の要旨

氏名 内海 敦子

バンティック語は、インドネシア・スラウェシ島北部のいくつかの村で話されているオーストロネシア語族西部オーストロネシア語派の言語である。優勢なインドネシア語におかれて、現時点では若い世代ではほとんど用いられなくなりつつあり、近い将来に消滅の恐れの大い言語の1つといえる。著者は過去10年にわたり毎年1・2回の現地調査を通じて、この言語についてのデータを蓄積し、また個別のテーマについて研究論文を発表してきたが、今回の論文はそれらの集大成として、バンティック語の音韻・形態・統語の全領域をカバーする総合的な文法を目指したものである。

本論文は、音韻を扱う部分、形態を扱う部分、統語を扱う部分と大きく分けることができる。音韻に関しては、とくにアクセントの記述が重要で、各音節が高か低で発音され、高から低へ変わる位置の違いが音韻的な対立をなすことを指摘している。形態に関しては、名詞・形容詞・動詞に付加される接辞の記述が中心だが、本論文ではこの言語の文法にとって特に重要な動詞につく接辞が詳細に分析されている。著者は、この言語の記述に際して、系統的により近い関係にあるフィリピン諸語の動詞に特有の「焦点」による分類をとらず、動詞を intransitive (Active Voice のみを持つ)、transitive (Active と Passive1 の Voice を持つ) および ditransitive (Active, Passive1, Passive2 の Voice を持つ) に分類して記述することが、バンティック語の動詞構造の分析として適切であると主張する。このような、ヴォイスを形成する「ヴォイス接辞」は、もっとも基本的なものとして原則としてすべての動詞に現れるが、これに加えて、意図や非意図を表すもの、causative や applicative などの機能を付加するもの、習慣・継続・反復などのアスペクトを表すものなど多数の動詞派生接辞が記述される。形態に続く統語を扱う部分では、名詞・形容詞・動詞に個々の接辞が付加された形を豊富な文例で例証している。特に動詞については、ヴォイス接辞と動詞派生接辞について、可能な限り1つ1つの動詞についてあり得るすべての形をチェックしようとしている。

本論文が現地調査に基づいた豊富なデータを分析して、この言語の包括的な文法を提示しようとしていることは疑いない。その意味で本論文はオーストロネシア言語学にとっても一般言語学にとっても重要な成果であり、また著者が若手研究者として着実な出発をしたと充分評価できる。他方で、語例・文例に与えられた英語の翻訳には改善の余地があり、また全体の構成も、重複が見られる一方で各章が必ずしも有機的に結びつけられておらず、よりわかりやすい提示のためには改めるべき点も多い。しかし本審査委員会は、バンティック語に関するこれまででもっとも充実した記述研究である点を重視し、著者の挙げた成果は上記の欠陥を補って余りあるものと評価した。

以上の理由により、本審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位を授与するにふさわしい水準に達しているものと判断する。